

## 「罪ときよめ」

ヨハネの手紙 I

1:1~10

### はじめに

今日からヨハネの手紙の講解メッセージを始めさせていただきます。この書簡の原文はギリシャ語であるとされていますが、筆者であるヨハネはユダヤ人でしたから、ヘブル語を話し、その視点、思考を持っていたと考えられます。ですからそのような視点で読み解くならば、一体どのようなメッセージを受け取ることができるか、という試みで取り組んでみたいと思っています。

### 1. いのちのことば

【新改訳改訂3】

I ヨハネの手紙

1:1 初めからあったもの、私たちが聞いたもの、目で見えたもの、じっと見、また手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて、

ヨハネはこれから述べようとしている「いのちのことば」について、それが一体どのようなものであるのかを、まず初めに端的に五つの動詞を用いてこれを説明しています。すなわち…①初めから「ある」、②私たちが「聞く」、③目で「見る」、④じっと「見る」、⑤手で「さわる」ものであると述べています。ではこの五つの動詞をヘブル語の視点から考えてみたいと思います。

#### ①初めから「ある」

「～である、～になる、起こる」という存在を表す動詞、ヘブル語でこれをハーヤー(הָיָה)と言います。最初の言及を見てみましょう。

【新改訳改訂3】

創世記 1:2 地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上であり、神の霊が水の上を動いていた。

天地創造の初め、「地」は混沌としており、形がなく何もなかった、「茫漠」とした状態「であった」と訳されているのが聖書で最初に使われたハーヤーです。このように、本来のハーヤーとは「地は～であった」とあるように、ただ存在するだけでなく、「地」にある、「地」に存在するという、「地」を指し示すものであることが解ります。つまり「いのちのことば」とは、天ではなく「地」に存在するものであるということです。またそれが『初めから』あった」と記されていますが、このヘブル語、ローシュ(רֹאשׁ)には「頭、王」という意味もあり、すなわち「初めからあった」とは、ヘブル語で見ると「地の頭」、頭は思考や計画を司る器官ですから「地に関する計画」、または「地上を治める、支配する王」という意味にも解釈することができます。

## ②「聞く」

「聞く」は、シャーマ( $\text{שמע}$ )と言います。最初の言及を見てみましょう。

### 【新改訳改訂3】

創世記 3:8 そよ風の吹くころ、彼らは園を歩き回られる神である【主】の声を聞いた。それで人とその妻は、神である【主】の御顔を避けて園の木の間に身を隠した。

エデンの「園」で発せられた「神である主の声」、それを「聞いた」と訳されているのが聖書で最初のシャーマです。このように本来のシャーマとは、神の声、御言葉を「聞く」ことを指し示し、またそれを聞く者は、神のみそばに「行く、近づく、集う」ことをも指し示していると考えられます。残念ながら「人とその妻」アダムとエバは罪を犯したために、逆に主の御顔を避けて隠れてしまいましたが、本来のシャーマは、神である主の御声を「聞いて」、神である主に近づくこと、主の御前に出ることを指し示していると考えられます。つまり「いのちのことば」とは、神の御声を「聞く」者、そして神に近づく者であることが示されていると考えられます。

## ③目で「見る」

「見る」は、ラーアー( $\text{ראה}$ )「見る、分かる、理解する」という意味を持つ動詞です。最初の言及は創世記 1:4 です。

### 【新改訳改訂3】

創世記 1:4 神は光を見て良しとされた。神は光とやみとを区別された。

これは天地創造の最初の御業である「光」が現れた場面です。神はこの「光を『見て』」と訳されているのが聖書で最初のラーアーです。このように、本来のラーアー「見る」とは「神が光を見る」こと、そして「光」だけに目を留め、これを「良し」とされ、「やみと区別」されたことを示しています。つまり「いのちのことば」とは、御業の初めに現わされた「光」のように第一の者、そして神に目を留められ、選ばれた者、他と完全に「区別」された者、神にとって特別な存在であることが示されていると考えられます。

## ④じっと「見る」

先ほどと同じく「見る」と訳されていますが、使われているヘブル語は違います。ナーヴァト( $\text{נראה}$ )「見つける、目を留める、見上げる、仰ぐ、振り返る」という意味を持つ動詞が使われています。最初の言及は創世記 15:5 です。

### 【新改訳改訂3】

創世記 15:5 そして、彼を外に連れ出して仰せられた。「さあ、天を見上げなさい。星を数えることができるなら、それを数えなさい。」さらに仰せられた。「あなたの子孫はこのようになる。」

これは神がアブラハムに約束された御言葉です。このように本来のナーヴァトとは、アブラハムが「天を見上げる」ことを指し示しており、それはすなわち「天」におられる神を「見上げ」、この御方にのみ目を注ぎ、その数えきれない、計り知れない御業、ご計画に加えられる、その一部となることが示されてい

ると考えられます。つまり「いのちのことば」とは、アブラハムとその子孫、すなわちイスラエルの民に見上げられる存在、いと高き御方、すなわち神である御方であり、この御方に目を注ぐ者は、計り知れない神のご計画に入れられるということが指し示されていると考えられます。

#### ⑤手で「さわる」

「さわる」は、マーシャシュ(שָׁשׂוּ)「さわる、なでる、手探りする」という意味を持つ動詞が使われています。最初の言及は創世記 27:12 です。

#### 【新改訳改訂3】

創世記 27:12 もしや、父上が私にさわるなら、私にからかわれたと思われるでしょう。私は祝福どころか、のろいをこの身に招くことになるでしょう。」

この箇所はアブラハムの子イサクと、その息子ヤコブの出来事です。ヤコブはイサクの長子エサウの弟でしたが、母リベカの指示により、父イサクを騙し、長子としての祝福を奪おうと画策します。年老いて目の衰えたイサクが、祝福するためヤコブに「さわる」ことに聖書で最初のマーシャシュが使われています。このように本来のマーシャシュとは、アブラハムの子イサクが「さわる」ことによって長子の祝福がヤコブすなわちイスラエルに与えられることが示されていると考えられます。つまり「いのちのことば」とは、神がイスラエルの民を、地上のすべての民族、国々の長子として祝福されることを指し示していると考えられます。

以上、「いのちのことば」について、これら五つのヘブル語の動詞はいずれも、神の御子、イスラエルの王メシアであるイエシュアを指し示していると考えられます。すなわちイエシュアとは、天地創造の初めからハーヤー「あった」おられた、この地を統べ治められる御方であり、また神の御声をシャーマ「聞いて」隠れることなく、神の御前に近づくことのできる真の人であるということ、そしてイエシュアとは、神がその御声によって呼び出し、選び出し、これをラーアー「見られ」て「良し」とされた御方であり、アブラハムとその子孫であるイスラエルの民がナーヴァト「見上げる、仰ぎ見る」いと高き王なるメシアなる御方であり、その王国はイスラエルの民にマーシャシュ「さわり」、これを長子として祝福し、それによって天の星々のように増え広がる神の国であるということが指し示されていると考えられます。

## 2. 交わり

1:2 —このいのちが現れ、私たちはそれを見たので、そのあかしをし、あなたがたにこの永遠のいのちを伝えます。すなわち、御父とともにあって、私たちに現された永遠のいのちです。—

そして「いのちのことば」の「いのち」とは「永遠のいのち」であることが述べられています。つまり神の御子、王であるメシア、イエシュアとその王国とは「永遠」であり、またイエシュアの御父である神が「ともに」おられるということが述べられていると考えられます。

1:3 私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。

「私たちの見たこと、聞いたこと」すなわちイエシュアについて、筆者であるヨハネは「あなたがたにも伝える」と言っています。実はこのヨハネの手紙は、一体いつ誰に宛てて書かれたものなのか、はっきりしていません。ですからこれは神によってヨハネが記した「あなたがた」に宛てて書かれた手紙であると考えられます。「あなたがた」とはすなわち、この手紙を読むすべての人のことであり、私でありあなたのことであると捉えて問題はないと思われます。そして「私たち」とはもちろん筆者であるヨハネのことですが、それだけではなく、ヨハネと同じ信仰、同じ視点、思考を持つ、当時彼とともにあった、または同じように歩んだすべての者を指していると考えられます。このヨハネの手紙は、そんな「私たち」と「あなたがた」が、「交わりを持つようになるため」に書かれた手紙であると述べられています。そしてその「交わり」とは、「御父および御子」イエシュアとの「交わり」だということです。この「交わり」をヘブル語ではハーヴァル(חַוָּוָּ)という動詞が使われています。これも最初の言及を見てみましょう。

【新改訳改訂3】

創世記 14:3 このすべての王たちは**連合して**、シディムの谷、すなわち、今の塩の海に進んだ。

この記述はアブラハムの時代に起こった大きな戦いについてのものですが、ここで「王たちは『連合して』…進んだ」と訳されている部分にあるのが聖書で最初のハーヴァルです。このように、本来のハーヴァルとは戦いを指し示すもので、ともに進み、ともに戦うためにハーヴァル「連合する、交わる」ことを意味しており、私たちが捉えている、一般的な「交わり」の概念とは大きく違うことが解ります。つまり筆者であるヨハネは、「あなたがた」すなわちこの手紙の読むすべての人に、御父である神と御子であるイエシュア、そして「私たち」とともにハーヴァル「連合して」戦おうと呼びかけていると考えられます。なぜならこのヨハネの手紙Ⅰが書かれた背景には、この当時イエシュアを信じる者たち、すなわち教会の中に、聖書の教えとは異なる思想が入り込み、多くのクリスチャンたちを惑わせ、墮落させていたからです。ヨハネはそのような誤った思想に惑わされることがないように、戦って打ち勝つことができるようにこの手紙を書いたと考えられます。

### 3. 喜ぶ

1:4 私たちがこれらのことを書き送るのは、私たちの喜びが全きものとなるためです。

またヨハネはこの手紙を書く目的について「私たちの喜びが全きものとなるため」と述べています。つまり読み手のためだけでなく、自分たちのためにも書いていると述べているのです。この記述から、すでに筆者であるヨハネや彼とともに歩む者たちもまた困難な状況に置かれている、誤った思想との戦いの中にあることが考えられます。そしてそれに打ち勝つために必要なものは「全き喜び」であると述べています。この「喜び」のことをヘブル語でスイムハー(שִׂמְחָה)と言い、サーマハ(שָׂמַח)「喜ぶ」という動詞が語源となる言葉です。このサーマハの最初の言及を見てみましょう。

【新改訳改訂3】

出エジプト記 4:14 すると、【主】の怒りがモーセに向かって燃え上がり、こう仰せられた。「あなたの兄、レビ人アロンがいるではないか。わたしは彼がよく話すことを知っている。今、彼はあなたに会いに出て来ている。あなたに会えば、心から**喜ぼう**。

これはイスラエルの民をエジプトの奴隷状態から解放せよとの召命を受けたモーセについての記述です。ここで神はモーセの助け手、同労者として彼の兄であるアロンを立てます。この御言葉によりアロンはモーセとの再会を心から「喜ぶ」ことが聖書で最初のサーマハです。このように、本来のサーマハとは、モーセとアロンがともにエジプトのパロと戦い、そしてともに神に仕え、働くために会うことを「喜ぶ」ように、「私たち」が御父とイエシュアとともに立ち、ともに歩むことを「喜ぶ」ことを指し示していると考えられます。

このように、いつの時代も御父とイエシュアを信じる「連合、交わり」である教会には、ともに立ち、ともに歩み、ともに働くことの「喜び」が必要であることが解ります。そしてその「喜び」が全きもの、満ち溢れるものであればあるほど、その教会は強くなります。ですからヨハネはそのためにこの手紙を書いたと考えられます。

#### 4. 光

1:5 神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない。これが、私たちがキリストから聞いて、あなたがたに伝える知らせです。

天地創造の初め、神は光とやみとを区別され、光を「良し」とされ、これをご自分のものとされました。「神は光である」とは神と「光」が全く一つになっていることを表しています。これはヨハネの福音書において

【新改訳改訂3】

ヨハネの福音書 10:30 わたしと父とは一つです。

と言われたイエシュアの御言葉につながると考えられます。つまり「光」とは神の御子イエシュアのことです。そしてこの「光」について、これをヘブル語でオール(אור)と言います。この最初の言及はもちろん創世記 1:3 です。

【新改訳改訂3】

創世記 1:3 神は仰せられた。「光があれ。」すると光があった。

このように「光」とは、神が「仰せられ」、全くその通りになること、神の命令に一つも違うことなく完全に従う存在であることが解ります。これが御父である神と御子イエシュアの関係です。つまり御父が命じれば、御子はそれに絶対に従うという、いわゆる絶対服従の関係です。もちろん奴隷とその主人のような、一切の口答えも許されずただ従う、従わされるという関係ではありません。実際にイエシュアは十字架にかかれる前夜、「みこころならばこの杯を取りのけてください。(ルカ 22:42)」と祈っておられます。ですからイエシュアはご自分の意志で、御父に対する愛と信頼のゆえに従っておられるのです。御父と御子の関係には必ず何等かの動き、働き、何かが始まり、その結果としての出来事が伴うという意味における服従関係、主従関係です。それが「神は仰せられた。「光があれ。」すると光があった。」という御言葉の中に表されているのです。父と子がただ仲良く暮らすというようなものでは、何の目的も計画も成し遂げられません。つまり、御父である神には、成し遂げたい事、ご計画があるということなのです。そ

の神のご計画を、神の仰せられたことに全く同意し、自ら従い、全くその通りに成し遂げるのが、御子イエシュアという御方なのです。そのような意味において、「神は光」であり、そしてその「光」とはイエシュアであるということが表されていると考えられます。

## 5. 罪

1:6 もし私たちが、神と交わりがあると言っているが、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであって、真理を行ってはいません。

先ほど「交わり」という意味のヘブル語ハーフアルが「ともに戦うためにも進む」という意味があると述べましたが、「神と交わりがある」ということは、神の目的、ご計画を聞き、それとともに歩むこと、従うことであり、そしてそこには必ず何かの戦いがあるということだと考えられます。ですからここで「やみの中を歩んでいる」者とは、その神のご計画を否定、もしくは誤解し、神とともに戦うことから逃げている者のことを指していると考えられます。

1:7 しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。

このように私たちの「交わり」とは、「光の中を歩む」光とともに進むことが示されています。歩む、進むということは、辿り着くべき場所、目的地があるということであり、それが神のご計画の完成を指し示すことは言うまでもありません。そしてそれは御子イエスの血によって「すべての罪から私たちをきよめる」ことであると述べられています。ここで改めて聖書が示す「罪」というものについて考えてみたいと思います。これをヘブル語でハーター(חַטָּא)「罪(を犯す)」と言います。この最初の言及は創世記 20:6 です。

### 【新改訳改訂3】

創世記 20:6 神は夢の中で、彼に仰せられた。「そうだ。あなたが正しい心でこの事をしたのを、わたし自身よく知っていた。それでわたしも、あなたがわたしに罪を犯さないようにしたのだ。それゆえ、わたしは、あなたが彼女に触れることを許さなかったのだ。」

これはアブラハムが自分の妻であるサラを妹であると偽ったことにより、彼女を妻にしようとしたゲラルの王アビメレクと、それをとがめられた神とのやり取りです。ここに示される、聖書で最初のハーター「罪を犯す」行為とは、「あなたが彼女に触れること」すなわちアビメレクが、アブラハムからサラを奪うことを指し示しています。もしそのようなことになれば、アブラハムとサラの間に生まれるはずのイサクの存在がなくなり、神がアブラハムに約束された、

### 【新改訳改訂3】

創世記 17:19 すると神は仰せられた。「いや、あなたの妻サラが、あなたに男の子を産むのだ。あなたはその子をイサクと名づけなさい。わたしは彼とわたしの契約を立て、それを彼の後の子孫のために永遠の契約とする。」

17:6 わたしは、あなたの子孫をおびたしくふやし、あなたを幾つかの国民とする。あなたから、王たちが出て来よう。

17:7 わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に、そしてあなたの後のあなたの子孫との間に、代々にわたる永遠の契約として立てる。わたしがあなたの神、あなたの後の子孫の神となるためである。

という約束、ご計画が果たされないことになってしまいます。このように本来のハーター「罪を犯す」とは、アブラハムとその子孫すなわちイスラエルの民に約束された神のご計画を、アビメレクがそうであったように知らなかった、聞かされていなかった、理解していなかったために、そのご計画から離れる、あるいは妨げようとする考え、行為を指し示していると考えられます。

## 6. きよめる

そしてこの「罪」から神はイエシュアの血によって私たちが「きよめて」くださるのだと考えるならば、それは神のご計画を知る、聞く、理解して受け入れることを指していると考えられます。この「きよめる」ことをヘブル語でターヘール(טהר)と言います。最初の言及は創世記 35:2 です。

### 【新改訳改訂3】

創世記 35:1 神はヤコブに仰せられた。「立ってベテルに上り、そこに住みなさい。そしてそこに、あなたが兄エサウからのがれていたとき、あなたに現れた神のために祭壇を築きなさい。」

35:2 それでヤコブは自分の家族と、自分といっしょにいるすべての者と言った。「あなたがたの中にある異国の神々を取り除き、身を **きよめ**、着物を着替えなさい。」

これはヤコブすなわちイスラエルが、神からの「ベテルに上り、そこに住みなさい。」という仰せに従い、出発する場面です。そこで「異国の神々を取り除き、身を『きよめ』」という部分に聖書で最初のターヘールが使われています。ベテル(בֵּית־אֵל)とは「神の家」という意味です。このように本来のターヘールとは、イスラエルが神の家、神の国に入り、そこに住むことを指し示しており、そのために彼らの「中にある異国の神々を取り除き『きよめられる』」ことを指し示していると考えられます。つまり神のご計画とはベテル、神の家、神の国が建てられることであり、そこに住むべきその国民となる者に、アブラハムの子孫であるイスラエルの民に与えられた約束、契約が果たされることを指し示していると考えられます。

1:8 もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。

この「罪」に対して、普通私たちは犯すことのないように、失敗しないように注意する、努力するというような捉え方をしてしまいがちですが、先ほどの創世記 20:6 でアビメレクに対して神が言われたように神は人に「罪を犯させないようにする」ことがおできになる御方であり、更には言えば人の罪を赦し、そして人が罪を犯さないように、造り変えることがおできになるのは神だけなのです。神の家、神の国に入るために、罪人を罪なき人へと造り変えること、それが神のご計画です。ですから「罪はない」と言う者はこのご計画を知ろうとしない、聞く耳を持たない、拒否する者、否定する者であり、このような者が神の

ご計画を知ることはなく、3節の「御父および御子イエス・キリストとの交わり」を持ち、4節の「喜びが、全きものとなる」ことはできないということが述べられていると考えられます。

1:9 もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

先ほど述べたように罪人をターヘル「きよめる」とは、神のご計画を知らない者が、それを聞いて信じ、受け入れる者へと変えられることであり、きよめられるためには、自分が罪人であること、すなわち自分が神について、そのご計画について知らない、聞いていない、理解していない者であるということをも認め、気づかされることがなければならぬということです。人はみな空腹を覚えるからこそ食べ、疲れを感じるからこそ休むのです。知らないこと、理解できないことに気づくからこそ聞き、そして知るのです。ですから「自分の罪を言い表す」とは、自分がいかに神について、そのご計画について知らない者、聞いていない者、理解していない者であるかということに気づかされる、認めさせられる者のことではないかと考えられます。

1:10 もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません。

「罪を犯していないと言う」者とはすなわち、この神のご計画を「偽り」誤りであるとし、知ろうとしない、聞こうとしない、理解しようとしなない者であるということが示されていると考えられます。このような者が神のご計画を知ることはなく、3節の「御父および御子イエス・キリストとの交わり」を持つこと、すなわちともに御父と御子とともに歩み、ともに進み、ともに戦うこと、そしてそれによって与えられる4節の「喜びが、全きものとなる」こと、すなわち御父と御子とともに進み、ともに戦う喜びを分かち合うことはないということが述べられていると考えられます。

今日においても、私たち教会の中に、聖書からのものではない、神のご計画を軽視、無視、あるいは否定するような思想、教え、考え方が次々と入り込んできています。私たちの戦いとは、これらのものから私たちの信仰を守る戦いです。この戦いに打ち勝つには、「御父および御子イエス・キリストとの交わり」、すなわち御父が御子に仰せられたということに示された神の目的、ご計画を知り、理解し、信じて受け入れること、そしてそれによって私たちの「喜びが、全きものとなる」こと、すなわち神のご計画がどのようなものであるのかということをも、ともに語り合い、伝えあい、分かち合うことが必要不可欠です。私たちは聖書を読み、御言葉に耳を傾け、神のご計画を知っても、それが断片的であったり、誤解であったり、あるいは忘れてしまったりという点では「罪人」すなわち知らない者、聞いていない者、理解していない者です。ですから私たちはますます「きよめられる」こと、すなわち神のご計画に耳を傾け、これを知り、理解することを求めてまいりましょう。私たちの中に、御父および御子イエシュアとの交わりがますます豊かにされますようにと祈ります。